書評: Sung-Doo Ahn: *Die Lehre von den Kleśas in der Yogācārabhūmi*. Alt- und Neu-Indische Studien 55. Stuttgart 2003

マルティン・デルハイ（著）
藤本庸裕・中山慧輝（訳）

本書は、安性斗（Ahn Sung-Doo）がランベルト・シュミットハウゼン（Lambert Schmithausen）の指導のもと執筆し、2001 年 11 月にハンブルク大学東洋学領域に提出した学位請求論文に若干の補訂を加えて出版したものである。本書の題材は「汚れ」あるいは「苦悩」（kleśa）――すなわち、輪廻的生存からの解脱を得るために完全に除き去らなくてはならない、情動的・理知的な性質を持つ宗教的に誤った捉え方――を取り扱った一連のテキストである。テキストは全て『瑜伽師地論』（*Yogācārabhūmi*, 以下『瑜伽論』）から採録している。ここに言う『瑜伽論』とは、仏教の学問に関する百科全書的な文献として理解すべきものであり、大乗仏教の瑜伽行派はこの書の編纂と同時に形成された。『瑜伽論』が精神史において大きな意義を持つことは、こうした同書の簡潔な特徴からすでに明らかであろう。しかし、残念ながら『瑜伽論』の文献学的解明は今なお全く不十分なままである。それだけに、主要な仏教教義の内容に焦点を当てながら同時にテキスト校訂の成果をも巧みに組み込んだ研究が出版されるのは歓迎すべきことである。

本書の中核をなすのは、テキストの校訂を含む第 1 部と、その箇所のドイツ語の訳注からなる第 2 部である。第 1 部では初めにサンスクリット語の原典で保存されている『瑜伽論』のいわゆる「基礎部」

（Grundteil, 本地分）に属するテキストが批判的に編集され、そこにチベット語訳の校訂テキストが付随する。その後、サンスクリット語では保存されていない、『瑜伽論』の第 2 部、すなわち「摂決択分」（*Viniś-cayasaṃgrahaṇī*）に属する三つのテキストのチベット語訳が続く。チベット語テキストの校訂に当たり、安はテンギュル（のこの部分）の伝承に関する二大系統[1]をそれぞれ代表する版（デルゲ版と北京版）を依用している。玄奘による中国語訳も一貫して取り入れられている。

さらに、本書に含まれる序論では最初に『瑜伽論』全体の著者問題と、この論書と他の初期瑜伽行派の作品との年代的関係についての研究状況が論じられる。また、同じ序論には安が校訂、翻訳したテキストの構成と文献史的分析、『阿毘達磨集論』（*Abhidharmasamuccaya*）の煩悩章の目次が示され、続いて anuśaya, upakleśa, (kleśa)saṃkleśa という三つの概念が『瑜伽論』においてどのように用いられているのかが論じられる。最後に、校訂に用いた文献的証拠と校訂方法に関する凡例が記される。補遺には安が引用した一次文献の書誌情報を含む略号表が最初に置かれ、次に本書で用いられた二次文献の一覧が示される。本書の末尾には、サンスクリット語とチベット語の術語、そして本書で取り上げた一次文献の箇所情報を選定して作った索引を収載している。

安が編集した最初のテキストは、すでに校訂された形で一般に公開されている「基礎部」の一部の章に属する。それはヴィドゥシェカラ・バッタチャリヤ（Vidhushekhara Bhattacharya）が校訂した『瑜伽論』の「基礎部」のテキストのうち、160 頁（10 行目）から 170 頁（10 行目）に該当する[2]。このバッタチャリヤの先駆的業績は間違いなく高く評価されて然るべきである。確かにバッタチャリヤは、ラーフラ・サーンク

[1] 訳者注。ここで言う「二大系統」とは、一つはデルゲ版とチョネ版の系統、もう一つは北京版とナルタン版、金写本の系統を指す。

[2] Vidhushekhara Bhattacharya, ed. *The Yogācārabhūmi of Ācārya Asaṅga, Part I*. Calcutta: Calcutta University Press, 1957. 続巻は出版されなかった。

リティヤーヤナ（Rāhula Sāṅkṛtyāyana）が過酷な状況下で作成したものの、時が経つうちに行方不明となってしまった、いわゆる『瑜伽論』写本の手写しを自由に使用することができた。しかしながら、彼がもっぱら依拠していたのは、（2006 年まで同じく所在不明であった）上述の写本の、ところどころ非常に劣化していた写真版とチベット語訳であった（なお、バッタチャリヤは非常に有益な中国語訳を参照していない）。どうしてサンスクリット語で保存されている『瑜伽論』の多くの部分が未だ出版されていないのかは、こうした当時の劣悪な状況から説明できよう。また、同じ理由から、バッタチャリヤ校訂本――これは印刷初版（Editio princeps）である――を再校訂することも急務であると思われる。

安の校訂テキストは間違いなくこの課題に非常に上手く応えた最初の成果である。特に、バッタチャリヤが安とは全く反対に、写本が異論の余地のないテキストを伝えている箇所に関して極めて頻繁に写本を読み違えている点は強調されてよい。ここではその例として、バッタチャリヤによって完全に損なった形で表されている無明（avidyā）と疑（vicikitsā）の定義だけを挙げておきたい。また、伝存写本の読みに対して改変が必要と見なされる場合に関しても、安の校訂テキストは明らかに大きな進歩を見せている。最後に、バッタチャリヤはしばしば暗黙裡に写本を訂正しているのに対し、安は二次的なものに分類される文献的証拠の読みを常に書き留めているが、これも方法論的に些末な違いとは言えないであろう。

私が見たところ、安の校訂テキストに改善案を加えられる箇所はほんのわずかしかない。しかも、特徴として、そうした箇所は内容の面で実質的に関連がない。四つの「繋ぐもの」（grantha, 繋）の列挙に関して、安（82 頁 6 行目以下）は、

> abhidhyākāyagrantho vyāpāda<ḥ> śīlavrataparāmarśa idaṃsatyābhiniveśa-parāmarśa<ḥ> kāyagranthaḥ

というテキストを提案している。しかしながら、この箇所は写本では、

abhidhyākāyagranthaḥ[1] vyāpādaśīlavrataparāmarśeti[2] / satyābhiniveśa-parāmarśakāyagranthāḥ

[1] あるいは abhidhyā kāyagranthaḥ　[2] 故に、安が脚注 273 で写本の読みを -marśa iti- とするのは正しくない。

となっている。私見では、これはむしろ本来、

abhidhyākāyagranthaḥ vyāpādaśīlavrataparāmarśedaṃsatyābhiniveśa-parāmarśakāyagranthāḥ

という文面であったことを示唆している（°idam° については下記参照）。この場合、この直後に続き、形式的に全く類似した構成を取る「障害」（nivaraṇa, 蓋）の列挙と完全に対応させるために定義の最後を °kāyagranthaḥ に訂正する必要はおそらくないであろう。安は『衆集経』（*Saṅgītisūtra*）の対応箇所を指摘するが、これは伝存写本の読みに 4 箇所の追加的な改変を必要もなしに行う根拠としては十分でないように思われる。なお残る iti / satya° についても、これを °itisatya° ではなく °idaṃsatya° と修正することは、私見では必ずしも説得力があるとは言えない（少なくともパーリ語の itisaccaparāmāsa を参照; *Critical Pāli Dictionary* s.v.）。さらに、80 頁 8 行目では、安は写本の通り te kleśāḥ sthāpitāḥ と読んでいるが、バッタチャリヤはチベット語訳を参照して te te kleśāḥ sthāpitāḥ と修正している。私にはチベット語訳とバッタチャリヤの読み方のほうが良いと思われる（むしろ安の翻訳はこの異読に合っている）。いずれにせよ、この読み方はせめて脚注に記載すべきであった。68 頁 6 行目の yat を yā に修正することに対する反証は、私見では安が 74 頁の脚注 193 で極めて説得的に論じているのと全く同じような仕方で行うことができる（ただ、接続詞的な yat を使った構文を「正しくない」（unkorrekt）と評したのは少し拙い気がする）。時折、脚注に些細な見落としや誤植がある。例えば、脚注 29 と脚注 174 は削除すべきであ

る。脚注 34 は “Bh. om. para” ではなく “Bh. om. vrata” とすべきであった。脚注 271 は「文」（Der Satz）ではなく「語」（Das Wort）と書くべきである。脚注 301 について、写本（Hs.）には avarākīrtti ではなく avarṇṇākīrtti とあり、バッタチャリヤ校訂本（Bh.）には ’vara° ではなく ’varṇa° とあるので、そのように修正する必要がある。

チベット語の校訂がサンスクリット語の校訂と同じように信頼できるテキストを提供しているのは明らかである。安はチベット語訳に疑問がある場合、テキストの II から IV の脚注において、頻繁にかつ効果的に中国語の対応訳を論拠として持ち出している。しかし、私が見る限り、ここで誤りの原因が翻訳者自身や翻訳者が使用したサンスクリット語写本にあり、チベットにおけるテキスト伝承の乱れにあるのでないと思われる場合、安はチベット語テキストに訂正を加えることはしない。だが、この点に関する序論（52 頁の項目 4）の説明では、安はこうした方法論的に妥当な手法を私が望ましいと思えるほど明確に示していない。安は、本来訂正案に用いられるはずのイタリック体の文を常に一貫した方法で使っているわけではない。そのほかには全く些細な誤りしか挙げることができない。例えば、112 頁の下から 4 行目は dang ldan pa ではなく dang bcas pa と読むべきである（脚注 495 のようにするのが正しい）。91 頁の下にある “21” という二つの脚注記号は “333” に置き替えるべきである。

また、翻訳も質が高く、特に数多くの注釈――一部は数頁にもわたる――が際立っている。そこでは中国語訳とチベット語訳の相違や内容上の問題が徹底的に論じられ、関連する膨大な数の一次文献から背景資料が収集されている。そこでただ一つ残念なのは、これらのテキストが時折、少なくとも専門家でない人にとって該当箇所を見つけるのが難しい形で引用されていることである。そこで、最初にいくつかの基本的な慣例を補足しておく。T（この後にテキスト番号が続く）は中国語仏典の『大正新脩大蔵経』を表し、安がしばしば AA_C（＝中国語訳の *Abhidhar-*

māvatāra）や Y_D（＝『瑜伽論』のチベット語訳のデルゲ版）などの形で他の略号に組み入れている C，D，P は、順次、T に収載された中国語訳仏典とチベット語大蔵経（特にテンギュル）のデルゲ版と北京版を表す。MauBh は *Maulī Bhūmiḥ*, すなわち『瑜伽論』のいわゆる「基礎部」を表す。ŚruBh (= *Śrutamayī Bhūmiḥ*), Cin(tā)Bh (= *Cintāmayī Bhūmiḥ*), *Bhāvanāmayī Bhūmiḥ* は、VinSg などによって限定されない限り、MauBh の各章を指す。Y_M は『瑜伽論』写本を指す。ここでは、完全を期すわけではないが、以下の補足を個別的に列挙しておく。AKBh の中国語訳 = T 1558, T 1559, vol. 29; AKṬU = シャマタデーヴァ（Śamathadeva）の *Abhidharmakośaṭīkā Upāyikā*, P No. 5595; Amṛta = ゴーシャカ（Ghoṣaka）の *Abhidharmāmṛtarasa*, T 1553, vol. 28; ASVy_D = *Abhidharmasamuccayavyākhyā*, D. No. 4054; *Dhātukāya* = T 1540, vol. 26; MĀ = *Madhyamāgama*, T 26, vol. 1; PSP については 49 頁の脚注 135 を参照; *Saṅgītiparyāya* の中国語版 = T 1536, vol. 26; *Vasumitrasaṅgīti* = T 1549, vol. 28; *Vijñānakāya* = T 1539, vol. 26. 以上の点――そして、少しばかりであるが、その他の形式面における欠点――は、印刷前の最終校正がもう少し念入りに行われても良かったことを示している。

序論における文献史を扱った箇所は、当然のことながら、主にシュミットハウゼンの先駆的な関連研究と、より多くの日本人研究者の論考にもとづいている。テキストの歴史的分析は主に安自身の研究成果を含み、特にそれは『瑜伽論』に流入した資料の異質性をさらに裏付けている。anuśaya という術語に関する項目では、安は基本的にこの概念の意味と、説一切有部と瑜伽行派におけるこの語の使い分けについて最も重要な情報をまとめるに留まっているが、upakleśa と (kleśa)saṃkleśa の議論にもとづいて独自の仮説を立てようとしている。私の理解が正しければ、kleśasaṃkleśa という概念は、kleśa（説一切有部の場合は anuśaya）という術語の用法のさまざまな系統をただ一つの体系に統合するために導入さ

れた可能性がある。そこでは、upakleśa という術語を kleśa という術語とは切り離して定義しようとする試みが重要な役割を果たしていたという。しかし、kleśasaṃkleśa という用語の出現は、karmasaṃkleśa と janma-saṃkleśa という術語の出現とほとんど切り離すことができないであろう。そのため、今後は安の考察にもとづいて、この三つ組の術語が『瑜伽論』においてどのように取り扱われているのかをより詳細に調べる必要がある。その場合、本研究では考慮されなかったいくつかの文章を取り上げることもできるであろう。例えば、この三つの概念が十二支縁起と同一視されることは『瑜伽論』ではまだ知られていないと安は述べているが（47 頁）、これは「思所成地」（*Cintāmayī Bhūmiḥ*）における「勝義伽他」（*Paramārthagāthā*）に対する注釈（ただし、あまり明確ではない）を参照することによって、おそらく今すぐにも修正できる。当該箇所のテキストはサンスクリット語で校訂され出版されているが、至急新しいものに替える必要がある[3]。

安（50 頁以下）は写本の状況を少し誤解を招くような仕方で記述している。多数の異なる写本や写真に分散しているものの、『瑜伽論』の「基礎部」のほぼ全体がサンスクリット語原典で保存されている。大部分の写本には「菩薩地」（*Bodhisattvabhūmi*）のテキストしか含まれていない[4]。一方、いわゆる「声聞地」（*Śrāvakabhūmi*）写本にはとりわけ

---

[3] George Elder, ed. *Buddhist Insight: Essays by Alex Wayman*. Delhi: Motilal Banarasidass, 1990, p. 342.

[4] 訳者注。本書評の出版後、デルハイ教授により『瑜伽論』に関する研究を包括的にまとめた次の論考が公開された。

Martin Delhey, “The *Yogācārabhūmi* Corpus Sources, Editions, Translations, and Reference Works,” *The Foundation for Yoga Practitioners: The Buddhist Yogācārabhūmi Treatise and Its Adaptation in India, East Asia, and Tibet*, ed. Ulrich Timme Kragh, Harvard Oriental Series 75, Cambridge, Massachusetts, and London: Harvard University Press, 2013, pp. 498–561.

当該の「菩薩地」写本の詳細については、この論考の 507–512 頁を参照され

「基礎部」の「声聞地」のほとんど全てが含まれている。安が使用した『瑜伽論』写本は今のところ写真版でしか利用できないが、これには前述の 2 章を除く全ての章が含まれている。これらの章の一部はさらに「声聞地」写本にも含まれている。『瑜伽論』の他の部については、最近、松田和信が全部で 3 枚の写本断片の同定に成功した。すなわち、「摂決択分」に属する単独の 1 葉[5]と比較的広範囲に及ぶ断片[6]、そして１葉を含む「摂異門分」（*Paryāyasaṃgrahaṇī*）の一節である[7]。

たい。以下の URL にて同論考の修正版が公開されている（訳者による最終アクセス日：2023 年 12 月 1 日）。

https://www.academia.edu/3358152/The_Yog%C4%81c%C4%81rabh%C5%ABmi_Corpus_Sources_Editions_Translations_and_Reference_Works?source=swp_share

[5] 訳者注。松田和信「『解深密経』における菩薩十地の梵文資料：『瑜伽論』「摂決択分」のカトマンドゥ断片より」『佛教大学総合研究所紀要』2, 1995, pp. 59–77.

[6] 訳者注。松田和信「ダライラマ 13 世寄贈の一連のネパール系写本について：『瑜伽論』「摂決択分」梵文断簡発見記」『日本西蔵學會々報』34, 1988, pp. 16–20.

[7] 訳者注。松田和信「『瑜伽論』「摂異門分」の梵文断簡」『印度哲学仏教学』9, 1994, pp. 90–108.

なお、松田氏が注 5 に記載する 1995 年の論考で発表できなかった「摂決択分」写本の残りの部分については、

Matsuda Kazunobu, “Sanskrit Fragments of the *Saṃdhinirmocanasūtra*,” *The Foundation for Yoga Practitioners: The Buddhist Yogācārabhūmi Treatise and Its Adaptation in India, East Asia, and Tibet*, ed. Ulrich T. Kragh. Harvard Oriental Series 75, Cambridge, Massachusetts, and London: Harvard University Press, 2013, pp. 938–945

を参照。これらを含めた「摂決択分」の写本情報については、

Choi Jinkyoung, “A Brief Survey on the Sanskrit Fragments of the *Viniścayasaṃgrahaṇī*,”『インド論理学研究』8, 2015, pp. 305–318

を参照。また、そのなかで言及される、サンクトペテルブルクに保存される 12 葉の写本に関する成果の一部については、

Choi Jinkyoung, “A Note on a *Saṃyuktāgama* Quotation in the *Viniścayasaṃgrahaṇī* Fragments from the St. Petersburg Collection,” *Saddharmāmṛtam:*

主に形式面における小さな欠点はいくつかあるにせよ、安の成果は『瑜伽論』の研究と仏教学という密林の探求に対して極めて有益かつ歓迎すべき貢献を果たしている。この点で安には心からの謝意を表する。

訳者付記

本稿は、山東大学人文社会科学青島研究院のマルティン・デルハイ教授（Prof. Martin Delhey）によるドイツ語の書評 “Sung-Doo Ahn. *Die Lehre von den Kleśas in der Yogācārabhūmi*. Alt- und Neu-Indische Studien 55. Stuttgart 2003”（*Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* vol. 157, no. 2, 2007, pp. 503–507）の日本語訳である。この書評で取り上げられた *Die Lehre von den Kleśas in der Yogācārabhūmi*（『瑜伽師地論』における煩悩論）は、『瑜伽論』のなかの煩悩に関する記述を収集し、サンスクリット語写本にもとづく校訂テキストとそのドイツ語訳を提示した文献批判的な研究書であり、瑜伽行派の研究において必須の参考文献である。

同書を著したソウル国立大学の安性斗退職教授（Retired Prof. Ahn Sung-Doo, 안성두）は、現在まで『瑜伽師地論』の韓国語訳を精力的に出版している。しかし、それらは日本ではほとんど参照されていないの

Festschrift für Jens-Uwe Hartmann zum 65. Geburtstag, eds. Oliver von Criegern *et al*., Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien, 2018, pp. 9–16,

98 フォリオに及ぶ新出断簡の詳細については、

Ye Shaoyong *et al*., “A Preliminary Report on the “Burnt Manuscripts” from Retreng Monastery: Bundle A,” *Śāntamatiḥ Manuscripts for Life: Essays in Memory of Seishi Karashima* (*Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica* 15), ed. Kudo Noriyuki, Tokyo: International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University, 2023, pp. 447–465（中国語版「热振寺“火烧梵本”的初步报告: A 帙」）

をそれぞれ参照されたい。

で、その書誌情報を以下に記しておく。

・『瑜伽師地論』「基礎部」の韓国語訳

書名: 유가사지론: 불교 요가 수행자들의 수행토대
訳者: 안성두, 이영진, 원과 스님, 운산 스님
出版社: 씨아이알
出版地: 서울
出版年: 2023

・『瑜伽師地論』「声聞地」の韓国語訳

書名: 성문지: 불제자들의 수행도
訳者: 안성두
出版社: 세창출판사
出版地: 서울
出版年: 2021

・『瑜伽師地論』「菩薩地」の韓国語訳

書名: 보살지: 인도대승불교 보살사상의 금자탑
訳者: 안성두
出版社: 세창출판사
出版地: 서울
出版年: 2015

このうち、2023 年 11 月に出版された「基礎部」の韓国語訳は、『瑜伽師地論』「基礎部」のうち「声聞地」と「菩薩地」を除いた箇所の翻訳と、「菩薩地」の「真実義品」（*Tattvārthapaṭala*）の新しい翻訳、さらに「摂決択分」の一部の翻訳を収載している。翻訳に当たっては、国内

外の研究者から提供された各種資料――『瑜伽論』写本の新しいスキャンデータを含む――にもとづいてテキストの修正を行なっている。

また、本書評を執筆したデルハイ教授は最近『瑜伽師地論』「基礎部」の「三摩呬多地」（*Samāhitā Bhūmiḥ*）と「非三摩呬多地」（*Asamāhitā Bhūmiḥ*）のサンスクリット語と玄奘の中国語訳を対照した次の索引を刊行された。

> Martin Delhey. *An Annotated Bilingual Yogācārabhūmi Index: Two Chapters on Meditation in Sanskrit and Xuanzang's Chinese Translation*. Indian and Tibetan Studies 14. Hamburg: Department of Indian and Tibetan Studies, Universität Hamburg, 2023.

本稿の日本語訳は、藤本が用意した下訳を中山が検討・修正する形で作成した。翻訳を快諾し、日本語の訳文について有益な助言を下さったデルハイ教授と、『瑜伽論』の韓国語訳の情報を教示してくださった釋雲山比丘（Bhikṣu Woonsaan SEOK, 운산 스님）に厚くお礼申し上げる。

本稿は、日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号 23KJ2058）および仏教伝道協会日本人留学生奨学金の研究成果の一部である。